

Title	パーリ聖典における輪廻とviññāṇaの研究 : 輪廻主体の問題を中心に
Author(s)	名和, 隆乾
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/55677">https://hdl.handle.net/11094/55677</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏 名 (名 和 隆 乾)	
論文題名	パーリ聖典における輪廻と <i>viññāṇa</i> の研究 — 輪廻主体の問題を中心に —
<p>論文内容の要旨</p> <p>パーリ聖典の伝えるところによると、当時の宗教ないし思想界における重要な問題は、輪廻や、輪廻する中で自己同一性を保持する、靈魂的存在である <i>ātman</i> を、如何に理解するかということであった。これらの問題に対する仏教側の態度は、およそ次の様であったと考えられる。すなわち、仏教側は、輪廻を、そこから脱すべきものとして否定的にその存在を認めていた。輪廻の存在を認める以上、輪廻する存在が要請される。これを仏教側は、次の様に解していた。すなわち、個体存在を、まずはその構成要素へと分析する。その主要な要素として、五蘊が挙げられる。これらの諸要素は、いずれも変化する無常なものとされる。一方、当時の宗教・思想界では、<i>ātman</i> は不変化・恒常的なものと定義されていた。これに対して仏教側は、経験世界に存在する如何なるものも、変化する無常なものであるから <i>ātman</i> の定義に合わないとして、経験世界の何処にもその様な <i>ātman</i> は見出されないと主張する (いわゆる非我説)。そして、その時々諸要素が揃った結果として生じている、現象的な個体存在が輪廻していく、という輪廻説を主張した。つまり、輪廻の中で不変化に自己を保ち続ける <i>ātman</i> の様な靈魂的存在について、そもそもその存在の有無を前提としない輪廻説を主張したと考えられる。一方で斯学では古くから、「<i>viññāṇa</i> (「認識 (一作用)、認識機能」。以下、識) が、仏教において、実質的に輪廻主体の役割を果たしていた」という程の説が主張されてきた。ただ、その役割が如何なるものであったかについて、これまで踏み込んだ考察が行われてきたとは言い難い。そこで本論文は、識が輪廻において果たした役割の詳細な解明を目指し、新たな知見を加えるものである。本論文は、「第I部 <i>viññāṇa</i> の基本的な性格について」、「第II部 輪廻と <i>viññāṇa</i> について」と名付けた2部より成る。第I部では、識の文字通りの意味 (認識、認識するもの) としての側面、つまり個体存在において認識を司る側面を基本的な性格と位置づけ、関連する用例を扱っている。次いで第II部では、輪廻と識の深い関わりを述べた用例を扱っている。以下、これら2部の概要を示す。</p> <p>第I部前半では、まず、識が如何に生起するかについて述べられた用例を網羅的に収集して提示している。これは、次の7パターンにまとめられる。すなわち、(1)「感官・対象→識→<i>phassa</i> (接触) →<i>vedanā</i> (感受)」、(2)「感官・対象→識→<i>phassa</i>→<i>vedanā</i>, <i>cetanā</i> (意思), <i>saññā</i> (表象)」、(3)「感官・対象→識→<i>phassa</i>→<i>vedanā</i>, <i>saññā</i>, <i>vitakka</i> (思いを遣ること), <i>papañca</i> (妄想)」、(4)「感官・対象→識→<i>phassa</i>→<i>vedanā</i>→<i>taṇhā</i> (渴望)」、(5)「感官・対象→<i>viññāṇa</i>→<i>phassa</i>→<i>vedanā</i>→<i>taṇhā</i>→<i>upādāna</i> (執着) →<i>bhava</i> (生存) →<i>jāti</i> (誕生) →<i>jarāmaraṇa</i> (老いと死) →<i>sokaparidevadukkhassomanass'upāyāsā</i> (悲しみ、嘆き、苦しみ、憂い、苛立ち)」、(6)「<i>nāmarūpa</i> (名称と形態) →識」、(7)「<i>saṅkhāra</i> (諸形成作用) →識」である。ところで、五蘊説、十二支縁起説が述べられる諸用例の中には、各術語の説明を含むものがある。そして、その説明において、<i>viññāṇakāya</i> (識の集まり) の様に、術語の後分に <i>kāya</i> という語が置かれていることがある。この <i>kāya</i> という語について考察した結果、該当例における五蘊説、十二支縁起説がそれぞれ、上の第2パターン、第4パターンを理論的背景としていることが分かった。この結果に基づき、五蘊同士の関係について、次の見通しを立てた。すなわちまず、感官とその対象を通じて識が生じる。感官・対象・識が揃って接触が生じる。接触を通じて感受、意思、表象が生じる、というものである。なお、上記は、両教説一般ではなく、十二支縁起説や五蘊説における術語の説明に、<i>kāya</i> という語を含む、特定の用例に関するものであることを断っておく。次いで第I部後半では、先行研究に拠りながら、識と <i>paññā</i> (智慧) の関係について考察した。すなわち、苦が生じた時、識は単に苦を苦だと認識するのみである。一方、智慧は更に、その苦の原因、その原因が抑え込まれることで苦が抑え込まれること、そしてその抑え込みを実現する道をも見抜く。この智慧は解脱を直接もたらす時だけでなく、修業階梯の低い段階においても働く。その働きによって、元々汚されていた識が純化される。そして純化された識により、微妙な瞑想の境地が認識され得るようになる。ここで更に智慧が働く事で、より深い境地に進むことが可能になる。</p> <p>次に、輪廻と識の関係について考察する第二部では、収集した用例の分析により、次の結果が得られた。すなわち、</p>	

(1) 「不変にして行為主体である識」が輪廻する (*saṃ-√sr*) という表現は、ブッダによって退けられる。ただしここで退けられているのは「不変にして行為主体」と限定された識であって、識が輪廻すること自体は退けられていない。一方で、「識が輪廻する」という表現が、仏教の正説として用いられることがない点には注意しておく必要がある。これと関連して、識と輪廻を表す語 (*√cyu, upa-√pad*) との関係について、或るパーリ經典とそのパラレル (『雑阿含経』) との間で、興味深い相違が見出される。すなわち、パーリ經典では識が、輪廻を表す語の動作主とは為されない一方、『雑阿含経』では識が、輪廻を表す語の動作主とされる。理論上、経験世界における如何なるものをも、不変にして恒常なる霊魂的存在と看做さない限り、識を、『雑阿含経』の様に、輪廻を表す語の動作主とすることは問題ない様に思われる。ところがパーリ聖典は、識を輪廻を表す語の動作主とは為していない。この事実からは、輪廻と関わる識に対する、パーリ聖典の慎重な態度が看取されると考えられる。(2a) 四識住説では、識の状態如何が、これを構成要素とする個体存在の状態如何を示すとされている。しかし一方で、識の状態如何は、これを構成要素とする個体存在が煩惱を抱くか否かによって左右されている。ここからは、識と個体存在との興味深い関係が読み取れる。また同教説では、識が四蘊に近づいたり (*upaya*)、四蘊において安住する (*prati-√sthā*) することが述べられている。これらの動作は、識が自ら意思を持って行動しているのではなく、個体存在に煩惱が存在することで、それに附帯して起こる識の運動であると考えられる。(2c) 識は、先に見た様に、個体存在の主な構成要素である五蘊のうち、*vedanā, saññā, saṅkhārā*が生じる際の起点とされている。(2d) 識は、胎児生成、出生、出生後の成長の必須要素とされる。(3) パーリ聖典では識が、「都城の中心にいる主」に例えられることがある。この記述は、個体存在における識の中心性を表していると考えられる。そしてこの性質は、(2a-d) で示した識の性質と関連すると考えられる。(4) 識は、人格を構成する1要素である点では、確かに先行研究の述べる様に、*Personlichkeitsträger*といえる。ただし、識だけがそう呼ばれ得る訳ではない。この点を、パーリ聖典における自己 (*ātman*) と呼ばれるものは何か、という点から考察した。パーリ聖典において、いわゆる通常の意味で自己と呼ばれるものは、その時々諸要素が揃った結果として生じている、現象的な個体存在であると考えられる。識は、そうした個体存在において、肉体や*vedanā, saññā, saṅkhārā*等と同様、自己を構成する一部であり、単独で*Personlichkeitsträger*の役割を担っているのではないと考えられる。

以上の2部を通じて本論文は、パーリ聖典における識の性格の俯瞰を示し、識が輪廻に際して担った具体的な役割について、新たな知見を加えた。以上に基づいて、輪廻と識の関係をまとめれば、次の様になると考えられる。すなわち、輪廻していくのはあくまで、その時々諸要素が揃った結果として生じている、現象的な個体存在としてである。このとき、識もまた変化する非恒常的な存在であり、あくまで、輪廻する個体存在の1構成要素として輪廻していく。この識の輪廻の仕方は、例えば、走行する車について、走るのは諸部品から構成される車であって、車を構成する部品が走っているわけではない様なものである。そして識は、この様に輪廻していく個体存在の中で、中心に位置づけられ、個体存在を構成する五蘊のうち、*vedanā, saññā, saṅkhārā*という三蘊が生起する起点であり、個体存在の状態如何を示し、胎児生成、出生、出生後の成長の必須要素としての役割を担っていたと考えられる。

本論文では更に、仏教における中心的な教理の1つである、縁起説についても新たな指摘を行っている。すなわち、(1) 従来『清浄道論』以前には確認されないといわれてきた、識と*jati*という2箇所において転生を含む、三世に渡る十二支縁起説の確実な用例を指摘した。(2) また縁起説において、肉体的要素 (*nāmarūpa*や*saḷāyatana*「6つの〔認識の〕拠り所」) と識の順番が入れ替わることがある。これは、次の様に解される。すなわち、識が入胎することで、胎児が生成されることを述べる文脈では、識が肉体的要素より前に置かれる。一方、既に身体が生成された者において、感官とその対象を通じて識が生じる文脈では、肉体的要素の後に識が置かれると考えられる。(3) また縁起支の数が、文脈に応じて変化していると考えられる例を指摘した。この指摘が正しければ、「基本的に縁起説は、縁起支の少ない方から多い方へと発展した」というこれまでの前提には、検討の余地があると考えられる。

本博論末尾にはAppendixとして、パーリ聖典における*ava-√kram*の動詞形、名詞形の構文についてまとめている。*ava-√kram*は、入胎を述べる用例において多く使用され、輪廻説に深く関わる語として、先行研究でも重要視されてきた。*ava-√kram*という語によって入胎が述べられる用例では、*ava-√kram*の取る構文が問題となることがある。これについて先行研究では、その構文について十分に調査を行うことなく、理解の可能性が推測されるにとどまっていた。しかし本博論において、*ava-√kram*の構文を調査してみた結果、これまで意味の特定が困難とされていた語について、格関係が特定出来たり、意味内容に関しても理解の進展が得られた。今後の教理研究において、こうした視点からの研究は一定の有効性を有すると考えられる。そうした研究の1ケースとして、パーリ聖典における*ava-√kram*の構文についてまとめた節を、Appendixとして収めた。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (名 和 隆 乾 )			
	(職)		氏 名
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授	榎本 文雄
	副 査	大阪大学 教授	湯淺 邦弘
	副 査	大阪大学 准教授	堂山 英次郎
論文審査の結果の要旨			
以下、本文別紙			

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： パーリ聖典における輪廻と *viññāṇa* の研究 — 輪廻主体の問題を中心に —

学位申請者 名和 隆乾

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 榎本 文雄

副査 大阪大学教授 湯淺 邦弘

副査 大阪大学准教授 堂山 英次郎

【論文内容の要旨】

本論文は、初期インド仏教文献の主要一次資料であるパーリ聖典において、認識作用ないし認識機能を意味する *viññāṇa* が輪廻に際して如何なる役割を担っていたかを文献学的に解明せんとするものである。

本論文は、*viññāṇa* の基本的な性格について論じる第 I 部と、輪廻と *viññāṇa* の関係について論じる第 II 部の 2 部より成る。

第 I 部では、まず、パーリ聖典において、輪廻の主体として明示されるのは *satta* (存在者、個体存在) であることを確認する。ついで、*viññāṇa* の文字通りの意味 (認識、認識するもの) に即した、認識を司る側面と、*viññāṇa* が他の要素と如何なる関係にあるかという側面を *viññāṇa* の基本的な性格と位置づけ、関連する用例をパーリ聖典から網羅的に収集して整理し、各用例について分析を行う。その際、*viññāṇa* の生起を説く用例に焦点を当てると、収集した用例は 7 パターンに整理でき、*viññāṇakāya* のように複合語の後分に *kāya* (集合) を有する語に着目することで、そのうちの 2 パターンが、それぞれ五蘊と十二支縁起の内容を説明する教説の理論的背景となっていると特定する。第 I 部後半では *viññāṇa* と *paññā* (智慧) の関係について考察し、前者は単に対象を認識するのみであるのに対し、後者はその対象の原因を見極めるなど、対象を深く洞察する点に両者の相違があることを明らかにする。

第 II 部では、輪廻と *viññāṇa* の関わりを述べた用例をパーリ聖典から収集して整理し、各用例について分析を行ない、以下のように論旨を展開する。まず、*viññāṇa* は、「都城の主」に比せられる例などから、個体存在において中心的要素と捉えられている。他方、*viññāṇa* が不変な行為主体として輪廻するという考えはブッダによって退けられており、また、輪廻を表す動詞の動作主として *viññāṇa* の使用を避ける態度も看取される。さらに、「四識住説」に着目すると、*viññāṇa* は個体存在における中心的要素ではあるが、*viññāṇa* の状態は個体存在が煩惱を懐くか否かに左右されるため、*viññāṇa* 自体に輪廻における行為主体性は認められない。*viññāṇa* が個体存在における中心的要素と看做される理由は、個体存在の主たる要素である五蘊説において *viññāṇa* が他のいずれの要素よりも先行する機縁として位置づけられているのが一因と考えられる。「*viññāṇa* が *ava-√kram* (降下) する」という入胎表現は、*viññāṇa* を構成要素とする個体存在が *ava-√kram* するという入胎の事象について、*viññāṇa* に焦点を置いた表現に過ぎず、*viññāṇa* 自体の輪廻における行為主体性を認める典拠とはならない。

本論文末尾には付録として、パーリ聖典における *ava-√kram* の用法を整理したものを附している。この動詞は誕生表現に用いられる重要な語であり、その構文を明らかにしたことで、解釈が別れてきた諸語について、格関係を確定し、意味内容の考察を行っている。

#### 【論文審査の結果の要旨】

初期仏教文献は、後の部派仏教や大乘仏教の文献と比べると内容が平明であるように見えるが、実は肝心な所で不明確な点が多く残存する領域である。輪廻と *viññāna* の関係もそのような問題点の一つであり、本論文はこのような困難な課題に果敢に挑戦している。

本論文が扱う輪廻思想は、仏教が誕生する以前に成立し、その後のインドの宗教や哲学を根底から基礎づけただけでなく、仏教やヒンズー教とともにアジア各地に伝えられ、日本人を含めインド文化の影響を受けた人々に広く信じられる基本概念となった。ところで、この輪廻の主体としてインド諸思想はアートマンと呼ばれるものを設定するのに対し、仏教はアートマンの存在を肯定しない。そこで、初期仏教のパーリ聖典では、*viññāna* が実質的な輪廻主体の役割を果たしているという学説が内外とも主流であった。本論文では、パーリ聖典の精緻な読解を基にして、*viññāna* の基本的な性格が纏められ、その上で輪廻と *viññāna* の関係について多方面から精密な考察が加えられている。

本論文の主要研究資料である初期仏教文献のパーリ聖典は、学界、とりわけ本邦では、イギリスの Pali Text Society で出版された刊本のみ利用に留まる傾向が強いのにに対し、本論文ではタイ、ミャンマーの各版も常に対照され、厳密な文献学的方法が採られている。本論文では、パーリ聖典から初期仏教思想を読み取るに際し、後代のパーリ注釈文献の解釈を常に参照しつつも、それを鵜呑みにすることなく、また、漢訳・チベット訳文献に見い出される平行箇所が存在しても常に考慮しつつも、その読みに安易に頼ることもなく、まずはパーリ聖典自体の用例を収集するという研究姿勢を採る。これは多大の困難を伴う研究姿勢ではあるが、初期仏教段階の、ひいてはブッダその人の思想を解明する上で不可欠の作業である。

その上で、本論文では「四識住説」に着目することによって、*viññāna* は個体存在における中心的要素ではあるものの、輪廻に主体的に関わるものではない点が明らかにされた。また、「集合」の意味の *kāya* という語が複合語の後半に来る場合の用法に関して、従来は説得力のある説明がなされたことはなかったが、本論文ではそれが認識対象の複数形に由来し、その点が、五蘊や十二支縁起の内容を説明する教説の理論的背景ともなっていたという斬新な学説も提示されている。付録のパーリ聖典における *ava-√kram* の用法一覧もよく整理された重宝なものである。このように、本論文は、パーリ聖典における *viññāna* を網羅的に検討してその性格の俯瞰を示し、*viññāna* が輪廻において果たす役割を綿密に特定した論文として高く評価できる。

ただし、本論文に問題がない訳ではない。取り組んでいる課題が困難であるだけに、考察の結果として得られた結論を補強する傍証をより一層加えることが望まれる。非専門家を含めた広範な読者のために、本文において専門術語の簡潔な説明を随所に挟む気配りがしばしば欠けている。節目ごとに論述を要約しつつ議論を展開するスタイルを採るため、論旨が辿りやすい反面、要約部分が本論文の中で繰り返されるのが気になる。

もっとも、以上の問題点は本論文の意義を損ねるものではなく、むしろ今後の研究の進展に展望を開くものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。